

「念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と、もうしいれてそうらいしかば、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。よろこぶべきころをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

第5組 天正寺住職

第9章「親鸞もこの不審 ありつるに」 嶋地 正孝

Text by Shimachi Shoukou

「歎異抄」第九章は唯円の「念仏が喜べない。浄土に生まれたいという心が起こらない」という問いから始まります。唯円が親鸞に出会ったのは十代後半、親鸞が六十歳の頃だったといわれます。その出会いを通して本願力回向の念仏に歓喜し、念仏一つに仏と出遇い続けてきたつもりの唯円が、気付けば自ら称える念仏との出遇いの感激がなくなってしまったのです。「どうして感激がなくなってしまったのか」。そこに唯円の切実な問題があります。本願に出遇うことは同時に我が身の事実に出遇うことです。確かに出遇ったはずなのに、いつの間にか虚しい自分がいた。そんなことを師親鸞に問うたら怒られるに違いない。それでも、問わずにおれない念仏者唯円がここに出てきます。その唯円の問いに「親鸞もこの不審をいつも抱えながら念仏を申してきた。唯円房も同じ心であったか」と、それが個人体験の問題ではなく、念仏申して生きること起こる、ただならぬ問題であることを確かめられています。

唯円から見れば師親鸞は念仏の教えを深くいただき、何の惑いもなく浄土を

願って生きておられる人であり、また、自分もそうなりたいと思っていたのでしょ。しかし、「親鸞も」の言葉に「自分に先立って悩みながら法に聞いていかれた人であった。師弟の違いはあっても同じ所に生きてくださった」と、本願念仏によって深くつながっていたことに感動したのでしょ。

念仏申しながら深いつながりを見失い、逆に虚しくなっていく自分とは何か、親鸞はその「不審」を本願に聞き直していかれました。「不審」とは九分九厘分かったが残りの一厘が分からないということではなく、真の念仏に領けない私があります。教えが難しいから領けないのではなく「不審なる身」を生活しているのです。念仏は如来回向の法です。つまり私達の努力の延長上に開けてくるのではなく、仏から開かれてくる道です。しかしながら、仏に「煩惱具足の凡夫」と言い当てられた自身は、その念仏をひたむきに聞き学んでいくことの中に、念仏を仏への掛け橋にしていこうとする心をこの身に深く潜ませています。そのことを「疑惑罪過和讃」に「自力の心をむねとして」と言われます。念仏申しながら自らの身と心をたのみ励む心、それは自分を立てようとして地獄・餓鬼・畜生の差別世界を造り産み続けていく心であり、また、総ての者が平等に一つになっていく浄土を汚し続けていくのです。その悲しみに「仏智不思議をたのみべし」の仏言を聞かれていかれたのでしょ。しかし人はいつの間にか悲しみを忘れ、また三悪道に埋没していきます。親鸞と唯円に起った「不審」は「たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」と願い、三悪道を造り続ける者でも見捨てないと誓われる本願の促しなのです。私が忘れても、見捨てることのない本願の確かさ。だからこそ「たのもしく」思えるのです。

唯円にとって親鸞は自分に先立って「煩惱具足」の身を本願に尋ねていかれた人であり、同時に自分が迷いの身を生活していることを教えてくれた人でもあります。しかし、親鸞には教えてやろうという思いはなかったのでしょ。むしろ、唯円が師親鸞を突き動かしている本願を自らの上に見出した喜びなのです。